

論文の和文要旨

氏名 野田 耕

(博士論文の題目)

小学校の休み時間における小学生の主体的身体活動の背景要因
：学校環境および生活状況に着目して

(博士論文の要旨)

序 章

本邦では、保育や教育の現場から子どものからだや行動の異変が実感されはじめて半世紀が経過した。そして最近では、病気や障がいとはいえないものの、さりとて健康ともいえない「からだのおかしさ」に関する保育・教育現場の実感の実体として、前頭葉機能や自律神経機能、睡眠・覚醒機能といった「神経系」の発達不全や不調が推測されている。実際、本邦の子どもを対象としたこれらの機能に関する事実調査の結果は、上記の推測がある程度の射ていること、ならびに、それらの機能の発達に身体活動が重要であること等を示唆している。しかしながら、それを生起する環境や生活要因については、それらが十分に明らかにされていないのがわが国の現状である。加えて、種々の先行研究の結果を勘案すると、実施する身体活動が自発的か否かに注目することは重要であると考える。

そこで本研究では、主体的身体活動を生起する要因を学校環境ならびに生活状況の側面から明らかにすることを目的とした。

第1章 子どもの主体的身体活動を生起する学校環境要因 [研究課題1]

本研究課題1では、小学生の休み時間における主体的身体活動の状況とそれを生起する学校環境要因を検討した。本研究課題の対象は、7つの小学校の3年生から6年生までの1,059名の子どもであり、分析にはデータに欠損がなかった898名(男子442名、女子456名)分のデータが使用された。本研究課題は、2015年10月から11月にかけて各小学校で調査を行い、生活状況、休み時間の主体的身体活動、学校環境等からなる独自の質問票によりすべてのデータを収集した。その結果、性、学年に関わらず比較的多くの時間が確保された昼休みの主体的身体活動の割合は50%以上(50.8~62.6%)を示した。しかし、始業前(18.4~56.4%)と中休み(22.6~68.3%)の主体的身体活動の割合は必ずしも高くなかった。また、男女によるばらつきや学年による差も大きかった。一方、主体的身体活動を生起する

様式3号

有意な関連として、始業前では、「性」(オッズ比:0.443, 95%信頼区間:0.332-0.591)と「遊びたい施設」(オッズ比:0.600, 95%信頼区間:0.438-0.820)が、同様に、中休みでは「性」(オッズ比:0.418, 95%信頼区間:0.312-0.561),「学年」(オッズ比:0.685, 95%信頼区間:0.596-0.788),「遊びたい施設」(オッズ比:0.534, 95%信頼区間:0.387-0.735),「遊びたい用具」(オッズ比:1.561, 95%信頼区間:1.083-2.249),昼休みでは「遊びたい用具」(オッズ比:0.547, 95%信頼区間:0.385-0.776),「教室階」(オッズ比:0.644, 95%信頼区間:0.492-0.843),「身体活動の好嫌度」(オッズ比:0.313, 95%信頼区間:0.193-0.507)が抽出された。以上のことから、小学校の休み時間における子どもの主体的身体活動を生起するためには、学校環境要因の改善がポイントであるとの結論に達した。

第2章 子どもの主体的身体活動を生起する生活状況要因 [研究課題2]

本研究課題2では、学校の休み時間における主体的身体活動を生起する生活状況要因を検討した。本研究課題の対象は7小学校に通う小学3から6年生1,059名であり、分析にはデータに欠損がなかった780名(男子384名,女子396名)分のデータが使用された。調査は2015年10月から11月にかけて実施された。その結果、主体的身体活動を生起する有意な関連は、始業前が「性」(オッズ比:2.909, 95%信頼区間:2.094-4.042),「起床時刻・中間群」(オッズ比:0.526, 95%信頼区間:0.353-0.782),「起床時刻・遅い群」(オッズ比:0.247, 95%信頼区間:0.167-0.365),「朝食の摂取」(オッズ比:0.472, 95%信頼区間:0.242-0.921),「スクリーンタイム・中間群」(オッズ比:0.660, 95%信頼区間:0.451-0.965),「スクリーンタイム・長い群」(オッズ比:0.399, 95%信頼区間:0.270-0.591),「習いごと」(オッズ比:1.713, 95%信頼区間:1.097-2.675),「スポーツクラブ」(オッズ比:1.593, 95%信頼区間:1.023-2.480),中休みが「性」(オッズ比:2.433, 95%信頼区間:1.783-3.320),「学年」(オッズ比:0.699, 95%信頼区間:0.605-0.806),「起床時刻・遅い群」(オッズ比:0.528, 95%信頼区間:0.369-0.756),「スクリーンタイム・長い群」(オッズ比:0.594, 95%信頼区間:0.679-1.930),昼休みが「スポーツクラブ」(オッズ比:0.659, 95%信頼区間:0.440-0.986)が抽出された。以上のことから、小学校の休み時間における子どもの主体的身体活動を生起するためには、睡眠の改善やスクリーンタイムのコントロールなどの取り組みが必要であるとの結論に達した。

結 章

上記2つの研究課題における研究知見を踏まえて、本研究では子どもの主体的身体活動を生起するための今後の実践課題として、「物理的な学校環境要因の充実と睡眠状況やスクリーンタイムに関する取り組みの創造」が提案された。